有りける。さて後こ。武者小路殿の庭の松かれなんとしける時。彼おとゞの件のうたをかゝせ給へるを。かりてかけられければ。又松生きなほりたりとなん

道晃法親王。白かゐの宮めでたくつくらせ給ひけるこ。ひろき椽のもみをたひらかこきりて。石などすゑて。すきのまちあひ所こなさせたまひけるこ。雨などふれる軒のさし出だしたるさまなど。たぐひなくおもしろかりけり。亦ふゆのさむき時ゐ。水間のさうじを。たてさせ給ひて。池のをし鳥を御覽じけり

心空華院の關白殿（鷹司兼照公 寺保十年薨）殊の外こけがらゐしきとをいませ給ひけり。常のとのゝうちをてらひみがゝせ給ふ事。一日こ三たび程有りけり。柱いたじきなど。のごふこも。自そひおゐしまして。御てかしをさへちかくとりよせさせたまひて。かしこく清くせよ。露けがらゐしきことあらば。あしかりなんなどの給ひけり。このおんぞうゐ。をべてさる御くせのおゐしけるこや。此おとゞ。後こゐ目しひさせ給ひてけり

有隣軒（輔信）と申したてまつりしも。いみじういませ給ひけり。侍ふ人あやまちて。疊こ手をさへつれば。をなてちあらてせ給ひけり。ひとの奉りたるものけがらゐしとて。むつがらせ給ひけるこ。小敍といふものをこのみて。うたせ給ひけんこそあやしけれ。本源自性院入道關白殿こ（近衛信尋公 法名應山）光悦が鯉を奉るとてをりあらば申させ給へふたつもじ。うしの角文字奉るなり

御かへし

いをのなのそれこゐあらでふたつもじ。牛の角もじひまあらばちと

同殿下こ。三宅亡羊が茶ほしな生姜をたてまつりける御かへし

たかのてらやまかりこしても見まほしな。法の師匠がありと聞とり

風早中納言（實種實永 七年薨）老のゝち。あつき日。内こさぶらひて。みづをのませけるを。みかど御らんじて。老いたる人ゐ水のむことといむなる物をとおほせられけれゐ。取りあへず

あなかしここが後のよを人といゞ。ときより外の水なたむけそ

と。勅答申されけり。今も此卿の御てかこゐ。ときのみたてまつり。水たむくることなしとなん

元文の帝（櫻町院）院こおゐしましける時。いかゞしたりけん。京極通の犬の御庭こ入りて。ありきめぐりけるを御らんじて。めなれをおそろしとて。いみじうおどろかせ給ひける。ひたをらこ御覽じおらせ給ゐざりけるここそ

延寶のみかど（霊元院）烏丸内府を（光榮公延享五年薨）いまいみじき歌よみなり。一生に秀歌十首によむべしとぞおほせられけり

久世大納言（通夏延享四年薨）ものへまうづとて。湯あみ給ひけるに。此湯にてけがれたることあるべし。火をあらためてこそ。更におほせよとて。あみてをしてあらためさせ給ひけり。後に火たきたるものあやまちて。烟草をたびて侍ると申しけり。此大納言のつねにかゝる事おはしければ。只人にはおはせぬとぞ申しける

おなじ大納言年老いて。腰二重なりけるを。世には蝦大納言殿と申し候ひける。いみじうみづてさせる人も。こしのほたりにてこそあれ。此卿は御むねのほどより。ふとかゞまりたるやうにおはしければ。あまりひまなくて。文つくるにゆりかゝりておはしける故にやと申しけり

中院内府も（通茂公寶永七年薨）御ひぢのわたり。つくるにあたるほど。いたくたゞれておはしましけりとぞ

この内府は。雷のなりてためくを。ことに好みきかせ給ひけり。常に端をやませ給ひけるが。いみじうおこりなやませ給ふときも。雷なり出でぬれば。即おこたらせ給ひけり。有る時にはゞだちいみじうもるに。寢殿のむねにのぼらせ給ひて。大笠などめしてぞ聞かせ給ひける。」萬里小路の南の門を。藤房門といふ。藤房の卿遁世の時（建武元年）此門より出でられければ。不吉の門なりとて。今にひらく事なし

御とのゐ處に。人のゐをれ置きたる印籠のあるをみしれる人。八條殿の（中納言隆英）なりと申しければ。ゐかき人々あけてみむとせられけるに。又さなせそといふひともありければ。通枝の中納言

八條が置きて印籠あけて見ん。蘇香園慮は何かあるべき

葉室殿（大納言顯孝）橋本殿（中納言實文）御てらからにて（芳橋本中納言實松男母同）御かたちも。こと人とも見えぬまで似かよひたり。橋もと殿。内よりまかでられける道に。久世大納言行あひて。葉室殿にせちなる事のあるを。やがてかたり出て給ひける。橋本殿さらにこそ心得てべられね。もし葉室にやおほせらるべからんと申されければ。大納言大に恥ぢおもてれけり。おなじ日の暮つかたに。又ゆきあひて。久世殿そこにこそ申すべかりけれ。まことに似させ給ひけり。けさも橋本殿に申したがへて。てぢ見侍りつと申されければ。おのれこそ今朝の橋本にて候へとて。諸ともにゐらひあはれけり。」一條攝政殿（兼經公寶永薨）節會の内辨をつとめさせ給ひ

て。後日に野々宮殿に（中納言定基正徳元年歿）御物語せさせ給ふついでに。おきないたく心してつかふまつりつるを。そこにも難なしとや見給ひけん。ひとつふたつなど申されよかしと仰せられければ。野々宮殿なにかさらに難とり出づべくも侍らぎと申されければ。おとゞいみじうよろこばせ給ひて。さればいかにとゝのへさせ給ふに。殿をば犬内辨とこそ申すべく候へ。あまりに口をしく候ほどに難とりいづべくも侍らぎと申されけり

延寶の帝おりゐさせ給ひし時。京極より西。冷泉通に法皇の御ものとおるしたる長びつをもて置きたり。その處のものさわぎひらきけるに。中においたる法師の。手に短籍をもちたるが入り居けり。この歌を院のみかどに御らんぜさせたてまつらまほしさに。かくて侍るなりと申しけり。其歌に

あし原のめでたき國をつかむとや。盲龜の甲にふたもとの竹

とかきたり。あやしきやつなりとて。おばらくをりに入れられけるが。させる罪なしとてゆるされけり。近江の國のものなりけり

明暦のみかど（後西院）茶の湯の數寄せさせ給ひけるに。井戸といふ茶碗をえさせ給ひて。二なくひめさせ給ふ。ある時にうへの人びとに。御茶をたまはせけるに。勸修寺の入道大納言（經廣法名昭光貞享五年歿）參られける時。此井戸にて御茶給ひけるに。入道井戸の茶碗と申をものこそ。名にはゝ承りて。いまだ見ず候へ。給はりて巨々見侍らばやと奏せられければ。給はりけり。入道茶わんを持ちて。かうらんにのぞきつゝ。見給ふほどに。とり落して。御前哉のよしある岩のかどにあたりて。くだけにけり。帝いみじうをしませ給ふ御氣色なれば。うちかしこまりて。まことにあやまちてとり落し候ひつれど。よくこそつかふまつりて候へ。井戸の茶碗は古きものにて。其かみいくらの人の手にふれけむもおぼろねば。けがらはしきえせ物にてぞ侍る。おほやけの御調度となさせ給ふべきものにも候はねば。くだけうせぬるこそ。まことにめでたく候へとて。まかり出でられけり。帝も然ることゝやゝ思しめしけん。御氣色なほらせ給ひけり。同御時よろづの風流を好ませ給ふあまりに。御脇差といふものをつくらせ給ひて。けうぜさせ給ひけり。それもそれも。此入道殿に見せさせ給ひければ。これは御てかしの姿にも候はねば。恩賜のれうにや候ふらんとて。やがて給はりて。いでられけり

草根集は。正徹法師が（松月庵）集なり。いみじうよみあつめたるものなり。元和のみかど（後水尾院）めづらしき心をよみ給ふごとに。またくせ法師もやよみおきつらんとて。此集をくりも

とめさせ給ひけるゝ。てやうよみ置きゝけりとて。いたさせぞなりぬる事。たび〳〵なりとぞ聞えし

久我内大臣（通誠公享保四歳）三位中將と申しける時。本願寺の姫君ゝをみそめさせ給ひけるゝ。艶書の歌とてつかはされける

そこひなき心の程はゝるかへる。岩井の清水いそぎとも去れ。」姫君の御返し

世々をへてたえぬ後こそくみ去らめ。岩ゐの水のそこひなしとは

智君ゝかたりて。久世大納言よませ給ひけり。御文はくれなゐのかみゝ書きて包ませ。おなじ色なる御かへしは。あをきうすやうゝて。おなじ紙ゝつゝまれけり。歌は中院内府ゝよませ給ひけり

野々宮殿皇后太夫ゝ補せられける時。職中の人うるはしく昇進などせで。なまじひゝ此宮ゝさふらふことゝ。うち〳〵ゝ歎きけるを聞きて。御番所ゝおほきやのなるしもとを常ゝかけおかれけり。何のれうゝせさせ給てんぞるぞと。人のとひければ。此比宮ゝさぶらふもの共の。あぶ〳〵なるやうゝ申すめるとぞ聞えつる。この司はいみじき清撰として。めで度めいぶくの事なるを。さるくせごと申すらんものを。てうせんとてぞかしと

こたへられけり

園大納言（基音）おもひかけぬふるまひある人なり。殿上ゝさぶらひて。攝政のめせば參ると。ことさらゝもとゞりをてなちてまゐらる。殿下かしらつきはいかゝと問はせ給へば。かいさぐりて冠を忘れてや候らんなど申されけり

九條の左の大とのは（尚實公）御たけ高くおほきゝおはしますが。内よりまかでさせ給ふほとゝ。大納言御後より。物うけたまてらせ給ふゝ。日野西殿（資興）をまたとく〳〵とうちまねがれければ。殿の仰ごとぞと心えて。手まどひをして。いそぎ出でられけるを。ちかく〳〵とまねぎよせて。さあふぎていで。猶殿西殿もたけ高さひとなり。西洞院の大納言（時成資永六歳）人々の沓のおとを聞きて。誰某といひあてられけり。内ゝさぶらひて。人々の參らるゝを物ごしゝきゝて。一人もたがはぎ。かしこくいひあてられける中ゝ。若き殿上人のまゐられけるを。あれはいかゝと問ひけるゝ。これはいまだよくしたゝめならはぬ人のなれば。聞きしられぎと申されけり

中つかさのみこ御數寄屋をいみじくこのみ給ひて。たてさせ給ふ。御ふすまの門松。萬歳など。年のてじめの景物をゑがゝせたまひて。引手をあてびの貝ゝし。御ふくろだなのひ

きてを。丸のゝもじまゝせさせたまひけるを。民部卿（冷泉大納言爲村）見給ひて

しめかざり松を引く手のれしあゝび。間毎まめてたう候はれける

と申されければ。みこかしこく興ぜさせ給ひける

元和の帝。位おりさせ給ひて。八十まならせおゝしましける年。てるのてじめまよませ給ひける

此春をせめて驚く身ともがな。恥ぢおほしてふ命ながさを。」内まに奉らせ給ひけれむ。御返し

このてるの八十を千代のてじめまて。命長さの限ぢられぬ。」時の上達部殿上人などゝとり〳〵まに御返しをたてまつられける中まに。中院内府

おどろきていく千代か經ん洞のうちまに。うきことぢらぬ命なかさゝ

院御覽じて。位おりぬとて。天下萬民のうき事ぢらぬやうやてある。あしくいてれまけりなどの給ゝせて。まめやかまに御氣色あしかりけり。これまつきて。すぢなき事どもをそうしきこえける人や有りけん。内府ゝ其後かしこまりまこもりおてしけり。其のち閑庭薄といふことをよませ給ひける

いつてりの世ましほしまぬ友ならば。かさほの尾むな秋風もふけ

此うたまよりてゆるされ給ひけり

中の帝の御時。庭田殿（大納言重賢）四辻殿（中納言實長）童殿上まて。二ところながら御おぼえことまて。常まに御坐の左右さらぎおてしましけれむ。世まゝ兩狛犬とぞつけられける。延寶の帝。煙草をよませ給ひける

蕃のかる藻まてあらねどけぶり草。なみゐる人のぢほとこそなれ

石山殿。中ごろ。ことやうなるきせるをつくりいだされたりけるを。石山させるとて。人々もて興じけり

伏見のみやつくりあらためられける時。寢殿のむねをあけたりけるまに。大なるむかでその棟を二まとひむかりして有りけり。工どもみあざみてのぞきける程まに。かいけちてうせまけり。さてほどなく敎忠のみこ（上野太守宮）かくれさせ給ひければ。其さとしまやなど。よまさたがましく聞えけり。」中院右大臣（道躬公元文四年薨）をさなくておてしましける時。つねまたかどのゝうへまおてしまして。古集など誦せさせ給ふ。父おとゞ（道茂公）てぢたまおてしまして。すこし誦しおこたり給へば。いかま〳〵とおどろかし給ひけり

雅喬の伯（白川元禄元年歳）歌よみのきこえたかゝりけり。みかど古今集の祕事。御傳受の時。おなじくゆるさるべきよし仰せごとありけれど。神祇のことをば。分ゝまたがひてつかうまつり候ふべし。歌ゝおのづから家々の候へば。あながちゝ執し候ゝもとて。辭し申されけり

宗時の中將。家ゝて。（持明院）郢曲をうたひすまされたりけるを。あやしげなるさぶらひの。門ゝたちて聞きけるが。雨のふり出でけるゝ。ぬれながら猶ねんごろゝきゝてたてりけり。さるもの候よし。人の申しければ。やさしきやつなりとて。よび入れさせ。をのこゝをゐて。ことさらゝ一曲をうたひてきかせられけり

此家ゝつたへらるゝ筆法ゝ。歌詠のふしとおなじ心得なり。ふでをめぐらすべきやうゝ聲ゝ甲乙の次第あるがごとしとぞ教へらるるなり。又飛鳥井の家の流ゝゝ。もじをすいさうの板ゝかゝせて。ならゝせらるとなん。これゝ墨のながれ。筆のいきほひ。露むかりもとぞこほる事あらじとなり

將軍家より。人々の源氏物語二巻つゝ書きて給ゝらんとて。御料紙を給ゝせたりけるゝ。資慶の大納言ゝ（烏丸宛文九歳）老のゝち。ちさきもじかく事くるしく侍るとて。ことさらゝ大なる

本をかきて奉られけるが。すぐれてめでたうぞ見えける。今ゝこの卿のかゝれたるふた巻のみ。中ゝおほきゝて有りとぞ。いつれの年ゝか有りけん。内の御會ゝ。爲綱の中納言（冷泉享保七年歳）岡新樹といふ題をとりて。吟じわづらゝれけるゝ。人々のゝ。みないでき て。硯まかなひなどさるゝまで。猶うちながめておもしければ。中院内府などかくおもをなど問ひ給ふゝ。中納言かく〳〵とよみて侍るを。このいつもじなんいかゝ置くべきともおほえ侍らぬと申されければ。内府よろこびて。やがてかゝれゝける

しら露のをかのやかたの若楓。ねてのあさけのかぜのをぐしさ

延寶の御時。のもじおほき歌よませ給ひて人々ゝもめされけり

老の身のこしの延ねば杖つきの。のゝ字のさまのしたるものかな

これゝ御門のよませ給ひけるとぞ。又

丸のゝ乃のゝ字のなかゝよの中の。人の心のまろきものぞよき

かたかなののゝ字のなりゝ似たるもの。竹の葉の玄の墨の一ふで

猶有りけれどわすれゝけり。此ふたつて實陰の儀同三司爲綱の大納言などの申すめる

この比。狛則安が（辻右京亮）もたる菊磨といふ筆ゝ。いみじき高名のものなり。千の屏上そこ

なゐれて大かた鳴らぞ。竹もくちつきしなつべからぞとなむ。この笙ゐ近衛殿の御物なり。高名の笙。北斗玉島など聞ゆ。北斗ゐちかき北。鷹司どのゑ傳てりてあり。狛高房辻圖書撥介四辻殿ゑて五常樂の急を吹けるゑ。音頭のてじめ。一句のうちゑ。六たび迄息をつきたりける。ことゑいみじかりけり

一とせなぞ〳〵文字といふもの。内院ゑもてあそむせ給ひけり

たゑのとら　たゝうがみ

むかふのきしくらくして船こゑしてよぶ

三みせん

これらゐ。おんのつくらせ給へるとなん。又たれかつくりけむ

人をうらみて月みゝらし入る

内侍のうへのきぬ藏人の下がさね

ほをまでたむぬる三把の木

又爲綱卿の作られし。なぞ〳〵ほくとて。人のかたりしてさみだれの雲ゑ入りぬる郭公

ゑとゝがさん

桃

内ゑ御連歌有りける時。光廣の大納言烏丸寛永十一歳いまだゑらゐゑて。殿上ゑ侍りけるゑ。執筆すべき由。御けしき有りけるを。家の子ゑ候へば。和歌の事ゐかたのやうゑ沙汰し置候。連歌の執筆つかうまつるべきやうこそ。いまだならゐぞなれと申されければ。さもいとれたりとて。ゆるされさせ給ひけり

武者小路の儀同三司の時。内ゑさぶらひてよませ給ひける

番所ほど寂しきものゐいつも鑵子の音ぞかりして

このうたをうへきこしめして。行くすゑ歌よみいでぬべきものなりとの給ひけり。近衛殿の御小ひつ十五年ひさしく南京興福寺の山門ゑありけるを。近きころかへし奉りけるとなん。其なかゑ有りがたき文どもおほかりとぞ。民部卿古今開見のゆるされたりける後。三條どのゑ參りて。其よろこびなどいひて立ちかへり。此よろこびぞ。大納言殿ゑ申もゑゐあらぞ。故公福卿ゑ申すなりとて出でられけり。御即位の日。火燼ゑたかれたる香の名。先帝の御時のをば治民。今上の御をもくれたけと申すとぞ。元和の御時沈の御すどろくの盤を人の奉りけるが。其盤ありがたき香ありけれぞ。きらせ給ひて。うへの人々ゑ給ゐせけり。たか里とぞ名付させ給ひける。「とゐましものを梅がゝゑ」といふ歌のこゝ

ろむへなるべし

道遥院のおとゞゐ。公事のいとまゝ萬のことこのませ給ひて。たきものなど興ぜさせ給ひければ。御方とて殿ゝもおほく傳にうたるを。公福卿にいかむかりのいとま有りてか。かゝるいたづら事にせんとて。すべて御ひとりをだゝとりよせざりけり

同殿ゝ京極黄門の百人一首かゝせ給へる色紙を。多くつたへもたせ給ひける。代々いみじきたからとして有りけるを。實教の卿（正三位大納言元禄十四年薨）の給ひけるに。黄門の徳にたふとぶべし。其文字にたふとぶたらを。かくてあらば中々ほかざまゝもてちらすやうもぞあるとて。みなとりいでさせて。うらうへゝしぶといふものをこくひかせられけり。さてのちに。色紙のくもりて。もじも見えぬやうゝなりたりとぞ

難波中納言（宗遠）かりそめゝたちてしらせ給ふゝ。人あへておよばぎとなん。たぐひなき鞠足ゝに。すべてさることあるゝぞ

南殿の花のさかりゝに。とし〳〵花の宴せさせ給ふゝ。非藏人の奉仕する事まげし。いそがにしき事たぐひなし。その中ゝ。あまりくにしくおぼえけるものゝぞ有りけん。花ゝなぐ非藏人とうちなげきけるを。ある上北面のきゝて。みづゝすむ北面とつけたりけるぞ

おかしき。北面にゆかしうもれども。御階の花見る事なければなり

中園殿（季豊）内より退出せらるゝ折。わかき殿上人たち。かのたちをとりかくして。御庭の櫻の枝ゝかけられたりけるを。こゝかしこもとめありきて。これを見つけて。えだ高ければ取りゝづらにれたるを。うたよませ給へ。とりてまゐらせんといにれければ

花ならば短尺をこそつきもせめ。昔も今もかたなゝきかと

上聞しめして。かしこくにめでさせ給ひけり。寛延の御ときとかや。」このごろある殿上人かたられける。今様のうたよむべきもじとて。歌にたぐあかぎ。えならず。我ゝうきなゝとかや。をべにゝをれゝけり。げゝ此頃にさるもじぞ。みゝかしかましきやうゝきこゆる。いゝしへの判者。つゝくしろうなどいふ詞を制せられけむに。そのところぞおほかるらん。いまに中々これあらましかばとおぼゆるものを。それをばなほ所せくまもりて。是をうちゆるべられたるに。やうある事ゝやあらん

あにれむかし。有りきてふなるくれ竹の。よつぎの翁ならませば。その言のその末も猶。をかしきふしぞまじらまし。まだ山ほきのふぢの木ゝ。そひまつてれるつたの身の。露と時雨も色ゝいてじと。おもひくちてにありけれど。さて山河の音ゝのみきゝ

をぐしなば。住のえの岸のくさてゝよ。うつもれん事もさきがゝをし鴨の。さわぐ入江の水ぐきゝよ。大うみのてしのそこてかと。波間のもくづかすめて。あしのしのやの。さみだれの世ゝもりいてば。よもやまの人わらへゝやならんとそらん

成章

おほうみのはし 終

此ふみハ。豊田勝豊が書うつせるを。梅田三彦がひめ持たりけるゝ。此ごろ不意ゝ。ふみ商人のもとより求め得つ。ふたりとも淺からぬ中の友なりしゝ。今ハともゝなき人となりし歎かてしさゝ。せめてもの心やりゝとて。かく表装などものしつ。もと題號も定かならざりけらし。假ゝ作者のうたの詞ゝよりて。大海のてしとうて書ゝゐるしぬ。慶應元年の冬。やすむろ

（この原本ハ小中村博士の所藏ゝかゝれりこゝの數行の文字ハ博士の奥書をそのまゝあけたるなりやすむろハ博士の家の號なり　編者識）

中島廣足大人增補 石川雅望大人原編

增補 雅言集覽

和装活字版 全五十七冊 正價金九圓五十錢 外ゝ遠送賃を要す

本書ハ皇國の古言雅俗を除ずことなく國史歌書物語文より拔萃し伊呂波分にして見易く例證を擧けたる有益の書なることハ世に普く知る所なるか該書ハ刊行半ゝ至らずして餘ハ寫本にて傳ふるも誤字脫文多かるを有名なる中島廣足翁の多年古書歌文の中より抄出して增補され且誤字脫文をも訂正し本書に載さる例語をも數多加へられたれハ學者座右ゝ闕く可からさる良書なり

中島廣足大人著

玉霰窓の小篠

和装半紙形 活字版 全五冊 正價金六十錢 郵稅金八錢

本書ハ本居翁の玉霰を初學ゝも解し易からしむ爲に例證を增加し且自らの說をも載られ引證せる歌物語の詞の中所々俗語を傍に附し其意を示されたれハ一讀して了解し易き歌學必用の良書と謂ふべし

今泉定介 畠山健兩先生校正

御伽草子 一名御伽文庫

洋装美製本 全二冊 正價金三十五錢 郵稅金八錢

本書目次

文正草子　鉢かつぎ　小町草子　唐糸草子
小槌草子　七草草子　物草太郎　御曹子島渡
蛤の草子　子歌盛　撥源氏草子　二十四孝
猫の草子　濱出草子　和泉式部　のせざる草子
浦島太郎　酒顚童子　横笛草子　梵天國
右ハ既ゝ世人の知る如く室町時代の前後ゝいでたる草子類を集めたるものなり總て廿三編何れも奇話珍談のみ故ゝ其の快味ハ普通の小說ゝ勝る事遠く文章ハ優麗ゝして一種の體をなせり然れ共從來刊行のもの至て少く且假字のみ多くして讀むゝ易からすこれ誠ゝ惜しむべき事なり弊舗故ゝ見る所あり今般今泉畠山兩先生の校正を請ひて普くこれを世ゝ公ゝするを得たり大方の諸君願くハ一本を購ひて平日の癖を散し併せてこの言の虛ならざるを知り給へ謹みて白す

吉田松陰先生遺著并自序跋　松陰先生遺墨四葉挿入

佐久間象山先生短評

幽囚錄

和装半紙形 全一冊 正價金二十錢 郵稅金四錢

此書ハ松陰先生か米艦に乘し海外に遊ふを謀り事成らす獄ゝ在て著述せる所ゝして外國の形勢樞紐の必要より說起して通信通市の急を論じ彌快明晰其卓見偉識千古比を見ず今般弊舗發賣の榮を得普く世の先生を慕ふ者ゝ頒たんとす讀ふ有志の士速ゝ來て之を讀み玉へ

公爵九條道孝君題字
從四位桂太郎君序

狩野德藏君編纂

再版 戊辰出羽戰記

明治戊辰東北ノ戰爭ハ會津莊内ノ德川恢復ヲ謀ルニ源淵レ仙臺米澤之ヲ助ケ主盟レテ奥羽越三十餘藩ヲ聯結レ以テ王師ニ抵抗セリ之カ爲ニ顯出セル砲烟彈雨激戰奮鬪或ハ忠臣義僕ニレテ悲憤ノ慘境ニ陷リ義士佞奴ニレテ一時ノ毒燄ヲ煽灼レ將卒日夜ニ馳驅レテ屍ヲ砲刀ニ懸レ魂ヲ原野ニ留ム其間ニ在テ奥羽鎮撫使三卿ノ崎嶇艱難ノ職中ヲ出入レテ遂ニ其重任ヲ全スル秋田藩ノ孤立義ヲ唱ヒ三卿ヲ迎テ家國ヲ護ニスル其他仙臺ノ白川口ヲ擁防スル米澤ノ越後路ニ轉戰スル會津ノ驍勇ナル庄内ノ精銳ナル官軍數々敗刃ヲ取ル等限ナキ内外紛擾ノ事頗大小悲壯ノ戰況ヲ詳錄レテ脱漏スル所ナク其文ハ簡潔ニレテ冗長ナラズ能ク要領ヲ得ケテ雜亂ナラズ大ニ世間流行ノ通俗軍談ヤ小說ト異ナリ且又之ヲ各藩ノ記錄ニ徵徵レテ源由スル所アリ之ヲ生存ノ諸氏ニ贊レテ一モ誤謬ナレトセリ方今東北戰爭ノ始末ヲ詳悉セル此書ノ右ニ出ルモノ無レ今回再版ノ一千部ニ限リ右ノ代價ニテ販賣ス

洋紙數百五十餘頁 正價金五十錢 郵稅金八錢　全一冊

勅語參考 教の園

樞密院顧問官伯爵東久世通禧公題辭
正七位内藤耻叟先生校閲并序
佐伯有義先生編輯並校正

上卷目次
諭族歌（大伴家持）門田の早苗（律　萬葉）
竹馬抄（足利義將）童子訓（貝原益軒）
老おとゝろ。桃の蕾。千年の基。（上杉治憲）
迪彝編（合澤安）慎始篇六化（渡邊之望）

下卷目次
座左銘（兼明親王）讀座左銘（大江淵昌）
御文のうつし（徳川家康）庭のをしへ（阿佛尼）
六論衍義大意（室直清）武士のをしへ（井澤永秀）
子をたて草（小池貞歌）積德歌（高田興清）
とむらひのたり（平雅論）附錄 馬戰孝義傳（源峯雄）

昨冬教育ニ關セル御勅語ヲ下シ賜ヘテヨリ既ニ一年有餘を經過セれども未其參考ニ供ヒベキ良書の世ニ出さるハ概歎の至ナり本書ハ古人の著書中より此御勅語の參考ニ最適切なる良書十有九種を撰集し親切丁寧ニ校正を加へたるものなれハ約くも教育ニ從事する人ハ必座右一本を備ヘどんびあるべからざるなり

洋裝美製本 全二冊 定價金五十錢 郵稅金八錢

明治廿四年十二月廿五日印刷
同　廿四年十二月廿六日出版

版權所有

校訂兼編輯者　今泉定介（佐藤改）　東京小石川區西江戸川町一番地
同　畠山健　同　牛込區水道町四十二番地
發行兼印刷者　吉川半七　同　京橋區南傳馬町一丁目十二番地
關西大賣捌所　松村九兵衛　大阪南區心齋橋南一丁目
發賣人　林平治郎　東京日本橋區箔屋町八番地
印刷所　必昇社　東京々橋區鎗屋町九番地

エト73

各府縣發賣所

東京日本橋通三丁目　北善書店
同京橋區尾張町　東海堂
同神田表神保町　東京太屋
同同本郷春木町　中西布美乃
大坂備後町　梅原龜七
同同北久太郎町　吉岡平助
同同久寶寺町　柳原喜兵衛
同南久寶寺町　三木佐助
京都新町通寺町通　便利堂
同河原町二條下ル　梅原支店
熊本新二丁目　大黑屋書舗
神戸相生橋東　長崎次郎
佐賀白山町　吉岡支店
愛知名古屋本町　河内壯助
靜岡新通一丁目　川瀨代助
同掛川　勝見儀助
石川金澤　三原屋甚藏
同同　近田太平
新潟新潟市　雲根堂
同水原　林富吉
同長岡　西村平郎
同　黑目十六

新潟長岡　上田屋治平
長野善光寺前　西澤喜太郎
同松本　水琴堂
同小諸　小山佐傳次
山梨甲府八日町　五明堂
群馬前橋本町　煥乎堂
宮城仙臺國分町　金港堂
同同　高藤書店
同同大町　正々堂
岩手盛岡吳服町　便益堂
山形八日町　五十嵐太右衛門
同酒田　白崎善助
秋田大町　本間金之助
北海道函館　魁文社
同札幌　石塚豬男藏
福島福島町　萱間左右太
栃木宇都宮町　正集堂
同　英々
茨城水戸上市泉町　川又銀藏
同石岡　高野清
同古河　高木文正堂
千葉佐原　朝野利兵衛
同千葉　多田屋支店
同佐倉　村山書房

914.5
H99T
I